

「フローズン・グラウンド」 ★★★

2013 (平成25) 年9月12日鑑

賞<GAGA試写室>

監督・脚本：スコット・ウォーカー

ジャック・ハルコム (アラスカ州警察の部長刑事) / ニコラス・ケイジ

ロバート・ハンセン (連続殺人鬼の男) / ジョン・キューザック

シンディ・ポールソン (17歳の売春婦) / ヴァネッサ・ハジェンズ

ジョン・ジェンティル / マイケル・マグレイディ

ライル・ホーグスヴェン / ディーン・ノリス

ジョディ・ブランドン / オルガ・ヴァレンティナ

カール・ガレンスキー / ブラッド・ウィリアム・ヘンケ

フラン・ハンセン / キャサリン・ラ・ナサ

シェル (売春婦の先輩、ストリップクラブ経営) / ジョディ・リン・オキーフ

アリー (ハルコムの妻) / ラダ・ミッチェル

クレイト・ジョンソン (シンディのボン引き) / カーティス・“50セント”・ジャクソン

2013年・アメリカ映画・105分

配給/ブロードメディア・スタジオ

<アンカレッジ売春婦連続殺人事件とは？>

実在した殺人鬼 (サイコ・キラー) を扱ったハリウッド映画は多い。その中でも最も有名なのが『羊たちの沈黙』 (91年) だろう。私の記憶に残る映画としては、『モンスター』 (03年) (『シネマルーム6』238頁参照) や『チェンジリング』 (08年) (『シネマルーム22』51頁参照) があるが、さて、ロバート・ハンセン事件とは？ またアンカレッジ事件とは？

1983年10月にアラスカのアンカレッジで逮捕され、結果的に懲役461年の刑を受けて、今も刑務所に服役中の男がロバート・ハンセン (ジョン・キューザック)。彼が拉致監禁し、強姦した上で、アラスカの荒野に解き放って人間狩りをするという残忍な手法で殺害していた売春婦たちは、12年間で24名に上っていたそうだ。

<本作のキーウーマンは、この売春婦！>

もちろん、私はそんな事件を本作ではじめて知ったが、本作のキーウーマンになるのは、ハンセンから強姦の被害を受けながらも、何とか魔の手を逃れることができた17歳の売春婦シンディ・ポールソン (ヴァネッサ・ハジェンズ)。彼女の必死の訴えを事情聴取しながらも、アンカレッジ市警察は、「町の善良市民」と言われているハンセンを疑わず、売春婦と客とのトラブルということで処理してしまっただが、そりゃ、いくらなんでもひどい。そんな市警察上層部の処理に納得できなかった、シンディを助けた警察官が事件の調査書類を上司に黙ってアラスカ州警察に送ったため、そこに登場してきたのが州警察の部長刑事ジャック・ハルコム (ニコラス・ケイジ)。警察を退職し、次の民間企業への就職が決まっているジャックは、当初は渋々シンディ事件にみるロバート・ハンセンの人物像を洗い直していたが、出てくるわ、出てくるわ。ひょっとして、最近立て続けに起きている女性連続失踪事件と連続殺人事件の犯人は、この男ロバート・ハンセンでは・・・。

『羊たちの沈黙』でのFBI訓練生クラリス・スターリング役も良かったが、最高に印象に残るジョディ・フォスターの演技は、ピンボール台の上でのレイプシーンを体当たりで演じた『告発の行方』 (88年) での熱演。他方、本作で17歳の売春婦シンディ役を演じたヴァネッサ・ハジェンズは、『ハイスクール・ミュージカル ザ・ムービー』 (08年) (『シネマルーム22』未掲載分) で圧倒的存在感を示した若手女優だが、本作のキーウーマンとなる売春婦役では、『告発の行方』におけるジョディ・フォスターの熱演に勝るとも劣らない、熱演をみせている。

<シンディの証言は？ その保護は？ 発見されたら？>

命からがら殺人鬼の手から逃れ、警察に保護されたにもかかわらず、自分の証言を信じてもらえず、ハンセンの逮捕に至らなかったことにシンディが絶望したのは当然。しかし、一介の売春婦にすぎない彼女には、それ以上に犯人を追及する手段がなかった。しかも、10歳そこそこから売春婦として働いていたシンディには、収入の手段としてはボン引き男クレイト (カーティス・“50セント”・ジャクソン) に頼っての売春しかなかったのも仕方がない。しかし、再度ストリートで客引きをしていてハンセンに発見されたら大変。そんなシンディに対して救いの手を差し伸べた(?) のは、売春婦の先輩シェル (ジョディ・リン・オキーフ)。彼女のストリップ・クラブでのポール・ダンサー (ストリッパー?) というまともな仕事(?) につけたのはラッキーだったが、今なおそれでも女漁りを続けているであろうハンセンに再度発見されたら・・・？

そんなシンディに証人としての価値を認め、証言を求めてきたのが、今やハンセンが連続殺人事件の犯人に違いないと確信し、ハンセン逮捕の執念に燃えるジャック。ジャックからの証言要請には応えたものの、この町に居たのではいつハンセンに発見されるかもしれないと恐れたシンディは町を出て行こうとしたが、妻アリー (ラダ・ミッチェル) の反対にもかかわらず、シンディを自宅に泊めてまで保護しようとしたのがジャック。犯人逮捕の執念に燃える刑事の姿はよく名作映画に登場するが、本作にみるジャックもそれだ。ハンセンに発見されたシンディには命の危険が迫っていたが、さて、ジャックいかなる執念でその阻止を・・・？

<物的証拠は？ 後半の焦点はその一点に！>

裁判で有罪と認定するためには本人の自白だけでは無理で、必ず補強証拠が必要だ。本作では現実にはハンセンから強姦被害を受けたシンディの供述は取れたが、それはあくまでジャックの捜査段階における証拠だから、もし法廷でシンディの証言がひっくり返ったら、あるいは厳しい反対尋問によってシンディの証言の信憑性が認められなかったら、ハンセンは無罪になってしまう可能性がある。市警察がハンセンを逮捕しなかったのだから、何も警察上層部がハンセンと結託していたわけではなく、決定的な物的証拠が見つからなかったためだ。したがって、懸命な捜査の結果、今やシンディの供述を中心として、ジャックは一連の殺人事件の犯人はハンセンにまちがいないと睨んでいたが、決定的な物的証拠がないと指摘されると、容易にハンセンの逮捕状を請求できなかったのは仕方ない。しかし、その間にも次の被害者が出る可能性が・・・。

しかし、シンディを執拗に捜し回っていたハンセンがシンディを見つけ出し、その殺害にかかろうとする寸前にジャックはハンセンを逮捕することができたから、まずは一安心。逮捕したハンセンを取調べている間に、ハンセンの自宅を家宅捜索し、銃や薬莖さらには被害者の遺品その他の物的証拠を押収すれば、ハンセンの連続殺人事件の立件は十分可能。そう判断し、懸命に家宅捜索を続けたが、既に警察の追及を免れるべく事前に自家用セズナに乗って物的証拠を山の中に捨ててしまったハンセンの自宅からは何の物的証拠も発見できなかったから、ジャックたち捜査陣はイライラ。頭の良いハンセンは、ジャックの厳しい追及に対してものりくらしと切り抜けていたから、このままでは証拠不十分としてハンセンの釈放もやむなし・・・。そんな状況下で、激を飛ばしたジャックの言葉に従って、再度、家宅捜索してみると・・・。

本作後半の焦点は、そんな物的証拠収集の一点にかかってくるので、それに注目！

<貴方の中にも、ジキル氏とハイド氏が・・・？>

本作を観て何よりも驚いたのは、犯人のハンセンが一方ではこれだけ大勢の売春婦たちを、これだけ広範囲に渡って強姦、殺害しながら、他方では家族とともに過ごす自宅では「良きパパ」を演じ、地域では「善良な市民」を演じていることだ。連続殺人事件の犯人が逮捕され、裁判にかけられると、通常では弁護人から心神喪失・心神耗弱の主張が出されるものだが、さてハンセンの場合は？ ジャックからの取調べに対する対応の利口さ、証拠隠滅工作の狡猾さ等をみれば、きっと弁護人からその主張はなかったのだろう。また、懲役461年という刑の重さからみても、多分その主張はなされなかったのだろう。

人間には誰でも表と裏の両面があることは、ロバート・ルイス・ステイーヴンソンの小説『ジキル博士とハイド氏の奇妙な物語』 (1886年) によって明らかだが、本作に見るハンセンのその極端さにビックリ！ もっともジキル氏とハイド氏の要素は何もハンセン特有のものではなく、私はもちろん貴方にもあるわけだから、本作を観ることによって、あらためてあなたの中のジキル氏とハイド氏について、しっかり考え見つけてみる必要があるのでは・・・？